

# 花 き

## 現 況

### 1 キ ク

奥越地区の秋植え夏ギクでは、3月18日現在で、平地の畝に積雪が殆ど見られない。2月20日から3月上旬（昨年3月上旬）に不織布被覆が行われた。和泉等の山間部でもほとんど積雪が見られない。秋植えキクの草丈は「あかね」で5～7 cm、秋植えピンチ栽培の「小鈴」で2～4 cmで、例年の4月上中旬の生育状況になっている。

春植えギクでは、親株育苗ハウスで採穂が3月30日前後（昨年3月25日前後）に行われた。

病害虫として、ネキリムシの被害が見られる。



写真1 挿し芽作業

あわら市では、無加温ハウスで採穂、挿し芽が行われているが、昨年より生育がかなり早い（写真1）。3月8日の調査で、「小鈴」で10～15 cmである。秋植え、春植え予定地の圃場では、湿潤な状態が続いており、畝立てが困難な圃場もある。

福井地区では、盆ギクの親株管理が行われている。

病害虫として、福井市東郷地区で、アブラムシが少～中発生、大土呂地区では特に発生はなかった（3月14日調査）。

丹生地区では、盆ギクの親株管理が行われている。

病害虫として、一部でアザミウマ類によるケロイド症状が発生している（3月15日調査）。

南越地区（越前市）では、盆ギクの親株管理が行われている。

病害虫として、一部品種の中位葉以下に、黒斑・褐斑病が多発していた（3月15日調査）。

二州地区では盆ギクの親株管理が行われている。

病害虫の発生は確認されていない。

若狭地区では盆ギクの親株管理が行われている。3月15日頃に挿し芽を予定している。

病害虫として、アブラムシ類、アザミウマ類が少発生している。

### 2 ユ リ

春江では、3月中旬にかけてLAユリの球根が定植された。二度切目のLAユリは出芽始めて草丈2～3 cmである。

### 3 トルコギキョウ

あわら市では、新盆出荷用の品種が2月下旬に定植された。抑制栽培二度切栽培で、3月上旬から古枝整理が行われている。芽の整理はまだ行われていない。

南越地区（越前市）では、9月中旬播種、11月中旬定植の作型（「ボヤージュグリーン、フルフル等」で、草丈は11 cm程度で9対程度（昨年：3 cm程度で7対程度）であった。二度切り栽培では、草丈3 cmで側枝数は2本程度（昨年：草丈2 cm、側枝数は3本程度）で、芽の整理まだ行われていない。

#### 4 ストック

あわら地区では、2月でストック部会としての出荷は終了、直売所へのお荷は3月中旬まで行われた。

南越地区（越前市）では、「カルテット」シリーズが栽培されている。3月15日の調査では、8月20日頃から8月末に播種された株で収穫が終了した（昨年8月22日播種で収穫終了、8月下旬～9月5日播種で収穫終了～80%収穫済み）。9月10日頃に播種された株では9割程度収穫が終了した（昨年9月12日～20日頃播種で90%収穫済み～収穫開始）。昨年より収穫は早く終了した。

二州地区では、9月25日定植の作型で、お荷は3月中旬で終了した。

若狭地区では、カルテットシリーズが栽培されている。10月中下旬播種の作型で、草丈70～80 cmで、開花、収穫中である（3月13日調査）。

#### 5 その他

あわら市のヒマワリ「サンリッチ」シリーズでは、2月20日播種の品種で、草丈13 cmまで伸びているが、発芽は不揃いであった（発芽率60%程度）。一方3月上旬播種の品種では、草丈が5 cmで発芽が揃っている。

## 対 策

### 1 キクのハモグリバエ類とカブラヤガの防除

- (1) ナモグリバエは4～5月にキクの暮れ植え栽培の株や、葉肉の厚い品種に発生するため、薬剤防除を予防的に行なう。例年被害が目立つ品種は、オルトラン粒剤（ハモグリバエ類に登録有）、スタークル顆粒水和剤（ハモグリバエ類に登録有）等を用いて、前もって防除する。
- (2) 5月まではナモグリバエ、6月以降にマメハモグリバエが発生し優占種が変わるため、多くの種に効果がある薬剤を選定する。特に4月が温暖な場合、ナモグリバエの発生が多い可能性がある。浸透移行性のあるダントツ水溶剤（ナモグリバエ、ハモグリバエ類登録有）、アクタラ顆粒水溶剤（ハモグリバエ類）、ジェイエース水溶剤（マメハモグリバエ）を組み合わせる。
- (3) ハモグリバエ類の幼虫が入った葉は二次発生と黒斑病や他病害の原因となるため、下葉かきをかねて除去する。被害がひどい場合は、落とした下葉も圃場から除去する（ナモグリバエは葉中で蛹になるため）。
- (4) 新芽が食害により倒れる場合はカブラヤガの存在が疑われる。捕殺するかカルホス微粒剤Fを地際に処理する。基本的に接触毒であるため、植物の株元処理か、幼虫が触れやすいように軽く混和する。

### 2 キクの挿し芽作業

- (1) 採穂の1～2日前に親株の病虫害防除を徹底する。芽の伸長初期には、保護殺菌剤、有機リン剤等の散布により、アザミウマ類や白さび病防除を徹底する。
- (2) 採穂時間はしおれやすいため、早朝に取るのがよいが、極端に露が多い時間帯は避ける。
- (3) 摘心した親株から採穂する。極端に太く生長したものからは採穂しない。挿し穂は手で摘み取り、展開葉3～4枚をつけ、長さ5～7 cmに調整する（写真2）。
- (4) 挿し穂は冷蔵すると挿し芽後の生育がそろい、エスレール10の効果も向上する。冷蔵する場合は、発泡スチロールの箱に、挿し穂の切り口を下にして1列に並べて詰め込み、5℃の冷蔵庫に7～10日、2℃で2週間まで冷蔵できる。
- (5) 軽い挿し芽用土は作業性がよいため、パーライト5+クンタ5、パーミキュライト5+ピートモス5等を用いる。
- (6) 土詰め後の用土は十分に吸水させておき、はし等で深さ2 cmくらいの挿し穴をあけるようにする。
- (7) 挿し芽間隔は葉と葉がわずかに触れ合う程度とする。間が空きすぎると活着が遅れる。挿し芽後十分にかん水し、挿し穴が塞がれるようにしておく。遮光下の暖かい棚上に置き、10日目以降少しずつ遮光をはがしてゆく。温床上では14日、無温床では20日で発根苗ができる。



写真2 採取した挿し穂

### 3 トルコギキョウの管理

- (1) 定植後は、活着と初期生育を促進させるため、根が張るまで十分に灌水する。特に、花のボリュームを出すため、花芽分化が始まる本葉8対（草丈が15～20 cm）頃までは水分や肥料を十

分に与える。二度切り栽培は、草丈が10～20cmに達した時点で、生育が良い枝を2本程度残してその他の枝を取り除く。多く枝を残すと、花のボリュームが出ない上、ネットと枝が邪魔で収穫がしにくい。

上葉が小さくなるうらごけがみられる場合は、圃場排水に努め、生育状況をみながら、液肥を施肥する。葉先枯れが出やすい品種はカルシウム入り液肥の葉面散布を行うとよい。

- (2) 春植えは、活着後の生育の状態を見ながら液肥（OKF-1の500～1000倍など）を中心に追肥する。
- (3) 定植後に生育が停滞し、葉が淡黄色になって枯れる場合がある。これは主に塩類濃度（最適な塩類濃度EC=0.3～0.5 mS）が1.0 mS/cm以上と高い場合に発生する障害の可能性があるため、圃場準備の際には土壌分析を行い、施肥量を調節する。また、ECの値が高い場合は、定植前に水をかけ流したり、床の表土を削り落とししたりして、塩類を除去する。
- (4) 土壌酸度が低い時も同様な障害が発生する。pHは6.5前後がよく、酸性土壌ではマンガン過剰の症状、上位葉先端や周縁部に黄白斑点、新芽の萎縮が見られる。1 m<sup>2</sup>あたり深さ10 cmの土壌のpHを1上げるのに必要な石灰資材は粘質土で120 g、砂質土で80 gとされる。そこで、対策としては薄い石灰水（消石灰等の石灰資材を水10リットルあたり100 g溶かしたもの）10リットルを3 m<sup>2</sup>に土壌施用する。効果が不十分であれば再度施す。
- (5) 立枯病はフザリウム菌とピシウム菌によるものが主である。フザリウムの病斑は灰白色粉状のかびが密生する。耕種的防除として過湿を防ぎ丈夫に育て、発病株は、抜取り焼却する。
- (6) 葉先枯れ対策には、日中の換気を十分行い、軟弱徒長にならないように管理する。雨や曇天が続いたあとの好天で発生しやすいため、雨や曇天の日は、扇風機や暖房機の通風運転で施設内の空気を常時動かすようにする。また、降雨によるハウスサイドからの雨滴で灰色かび病や立枯れの発生が助長されるので注意する。

#### 4 ヒマワリの播種と育苗管理

- (1) 天幅90 cmの50 m畝では約2500～3000本の苗が植わるので、種子量は5 dℓ（約4000粒）必要である。
- (2) 200穴のセルトレイに播種する。種子は横向きに並べ、種子が隠れる程度に覆土する。覆土後は新聞紙で覆い、十分灌水する。
- (3) 発芽温度は、20℃以上（発芽適温26℃）を確保する。低温で発芽揃いが悪くなると、その後の生育にも影響する。放射冷却で低温になる時は不織布をベタガケする。
- (4) 3～4日で発芽が始まるので、新聞紙を取る。発芽時に子葉についている種皮が取れないようであれば手で取り除く。
- (5) 若苗定植が原則なので、最初の本葉が展開した頃（播種10日後）に遅れないよう定植する。
- (6) 早生品種は4月下旬播種で6月中旬に開花する。「サマーサンリッチパイン」「マンゴー」「オレンジ」の順に開花する

#### 5 スイセンの春以降の管理

- (1) コンテナ栽培のスイセンはハウスの外に出し、朝日が当り、夕日が当たらない半日日陰の場所に移す。ハウス栽培のスイセンは気温が20℃程度に管理できるように、日中はハウスを開放する。できるだけ葉を成長させて、切り下球の肥大を図る。灌水は適宜行い、土壌が湿っているように管理する。極端な乾湿は避ける。

- (2) 5月下旬までは十分に光合成をさせて、球根の肥大を促進する。
- (3) 6月上旬ぐらいに地上部が3分の2程度枯れたら、掘り上げ準備を行う。その時に残った茎をつけたまま掘り上げ、風通しの良い日陰で乾燥させる。

アメダスのデータ



